

# 多摩市農業委員会だより

第46号

令和6年1月1日

編集・発行

多摩市農業委員会

多摩市関戸6-12-1

☎ 042-3338-6848

# 世代を超えて 収穫の喜びを！

## 農業ウォッチングラリー

### 開催！



令和5年11月12日に、多摩市農業委員会主催の「農業ウォッチングラリー」を開催しました。この事業は、多摩市の農業を市民へ広く周知し、市民と農業者との交流を図るために実施しています。11月に入っても汗ばむような日が続いていましたが、当日は、最高気温12℃という肌寒い曇り空のもと、43名もの多くの方々にご参加いただきました。(2ページへ続く)



(1ページから続き)

朝9時に市役所前広場で開会式を行い、多摩市長・農業委員会会長の挨拶のあと、2班に分かれて出発です。

多摩ニュータウン通りを進み、ひとつ目の目的地、乞田にある伊藤さんのミカン畑へ向かいます。20分程歩くと、鮮やかな黄色のミカンが鈴なりになった畑が見えてきました。伊藤さんの畑では、温



州みかんを23年前から30本ほど植えて大切に育てているそうです。収穫についての注意事項を聞いて、早速収穫開始です。味見を兼ねて試食すると、樹木ごとに味も大きさも違うことに気付かされます。参加者は、より甘いミカンを求めて圃場内を巡ります。「初めてミカンの収穫をしました!」「こんな身近にミカンの畑があるとは思わなかった!」と、ミカンをほおぼった参加者からは、おいしい笑顔がこぼれていました。

続いて、ミカン畑から数100メートル先にある、これまた伊藤さんの畑で、ホウレンソウの収穫です。ここで伊藤さんから嬉しいサプライズが!「ホウレンソウだけでなく、隣に植えられてるコマツナも一緒にどうぞ!」ということで、2種類の野菜を



収穫できることになりました。参加者の皆さんは、ホウレンソウのほかに、喜々としてコマツナを5株ずつ、丁寧に根っこを切って収穫しました。

最後に、和田の石阪さんの畑へ長ネギの収穫体験に向かいます。途中にある愛宕神社で、農業委員の柚木さんから、神社の歴史や祭のことなど、地元ならではの話を聞くこともできました。



15分程歩いて石阪さんの圃場へ到着。圃場内には落ち葉がたくさん積んであり、ご自身で堆肥を作っているとのこと。今年は、例年にない暑さと雨不足で圃場の管理が難しかったそうですが、自家製堆肥のおかげでしょうか、ふかふかになっている土で、すくすくと育った長ネギを収穫しました。

3カ所の収穫を終え、交流会会場へ移動しました。新型コロナウイルスの影響で4年ぶりの開催となった交流会では、市内産の野菜と味噌を使った豚汁を食べながら、多摩市の農業に関するクイズ大会を行いました。ユーモア溢れる設問に、参加した皆さんは、真剣な表情で考え、答えていました。

豚汁は、地元農家の小暮さん・柚木さん・藤井さんがふるまってくださり、冷えた体を温め、たくさん歩いて空いたお腹を満たしてくれました。



自分自身、2回目の参加となった農業ウォッチングラリーですが、先輩農家はもとより、地域の皆さんとたくさん話すことができ、農業委員として大変有意義な活動になりました。また来年も、さまざまな機会で、市民の皆さんと多摩市の農業を通じて一緒に交流できたら、非常に嬉しく思います。

(農業委員 太田 盛久)



昔と今の写真で多摩の農地を比較するシリーズです。  
 が、しかし！今回はあいにく昔の写真を用意することができませんでした…(あいすみません)。  
 そのお詫びと言ってはなんですが、今回は、多摩の農家の、ちよいと昔の、しみじみとしたノスタルジックなお話を、皆様にお聞かせしましょう…。  
 はてさて、皆様のお口に、いやお耳に馴染みますでしょうか…？  
 しばしお付き合いのほどを…。

## 禅寺丸と大八車

ぜんじまるとだいはちぐるま

私の幼少期、現在の我が家の畑(関戸付近)は、約半分が棚田模様の水田で、残りが栗や柿の木、その間が畑となっていました。

多摩村は昔から傾斜地が多く、水田となる土地も少なかったため、主に養蚕(ようさん)を営み、ほかに柿や栗、米などで現金収入を得ていたようです。

今回は、明治27年生まれの祖父から聞いた「柿についての話」を紹介することにしましょう。

柿の種類は「禅寺丸(ぜんじまる)」といい、王禅寺(神奈川県川崎市)の和尚が、突然変異によって渋柿が甘柿になった木を発見したことに端を発し、近在の多摩地域に広まった種類であると聞いております。やや小ぶりで野性味のある禅寺丸柿は、近年の復刻ブームで、もてはやされているとかいないとか…。

さて我が家の畑にも、誰が定植したかは不明ですが、この柿の木が何本もあり、私が幼少のころは、祖父や父が、府中の青果市場に出荷していたことは、おぼろげながらも記憶に残っています。

大正から昭和初期の頃のことだと思いますが、祖父は、この禅寺丸を、大八車に積んで神田市場まで運んで行っていたとのこと。当時、まだ多摩川に関戸橋はかかっておらず(初代関

戸橋の完成は昭和12年)、日野橋を渡り、甲州街道に出て神田へ向かうという、片道30km以上の、とても長い道のりであったとのこと。神田から戻ってくると、勢い次の荷が準備されていたとので、さぞやその苦労が身に染みてわかろう、というものです。

この神田市場行きの際は、必ず二人組で行くのが決まりだったそうです。その理由は、道中仙川(調布市付近)の坂が、それはそれは難儀な急坂のため、ひとりでは大八車を引き上げることができなかつたそう。で、坂の手前で、まず片方の大八車を二人がかりで坂の上に引き上げたのち、二人で坂を下り、再び二人がかりで残ったもうひとつの大八車を引き上げる必要があったため、だそうです。

この話を聞いたときの私のひとこと、「じいちゃん、随分ヒマなことをしていたねえ…」

祖父の返答は、「車も電車もなかったんだから、それは歩いていくしかなかったんだよ…」と、ポツリ…

祖父は86歳で永眠

しましたが、亡くなる日まで庭木の剪定をしていたほど、病氣知らずの人でした。

私自身も、祖父の年齢にも近づいてきた今日このごろ、「とてもじゃないけど祖父の真似はできないなあ…」と痛感しているところです。

多摩市の緑豊かな環境を、昔話の心地よさにしみじみと浸りながら、先人の苦労の積み重ねの賜物であることを再認識し、「良いものは良いままに、次世代へ引き継いでいきたい」と思っています。

(文 農業委員 須藤 忠志)

(写真協力 須藤 晃延)



▲明治時代から実をつけ続ける須藤家の禅寺丸柿